

# びやくどうかいたたいかい 白道会大会

去る八月二十七日、二十八日、蔵本通支坊において白道会大会が開かれました。今年も、日本医師会生命倫理懇談会の委員であり、お酒「忘憂」の生みの親でもある鍋島直樹先生をお招きしてお話を聞きました。



公開講演会では約140名の参詣者で満堂になった。

「われ今幸いにまことのみ教を聞いて、限りなきいのちをたまわり：、お経の前にいつも私たちはこと言葉を口にしますが、この「限りなきいのち」とは一体どういう意味でしょうか？「死なないこと」でしょうか。

限らないいのちをたまわるとは、限らないいのちの仏、阿弥陀仏に私たちが出遇うということとです。「限らないいのちの仏」とは、「死んでしまった過去の仏さま」ということではなく、ずっといつしよ、今も私といつしよ、いつもいつしよの仏という意味です。そのこととは、仏さまの慈悲の心を意味します。先生は、そのことについて、平野恵子さんという方のことをご紹介くださ

鍋島先生（写真左）。父王を殺し、母をも殺そうとした罪悪感に苦しむ王子アジャセの救いについて、人間相関図を使ってお話くださいました。



り、分かりやすくお話くださいました。平野さんは、三十九歳でガンの告知を受け、そしてお亡くなりになったそうです。以下は三人のお子さまに残された言葉です。

「元気でいられる間は、ご飯を作り、洗濯をして、できるだけ普通の母親でいること、徐々に動けなくなったら、素直に

動けないからと頼むこと、そして、苦しいときは、ありのままに苦しむこと、それがお母さんにできる精一杯のことなのです。そして、死は、多分、それがお母さんからあなた達への最後の贈り物になるはず。人生には無駄なこととは何一つありません。お母さんの病気も、死も、あなた達にとつて、何一つ無駄なこと、損なこととはならないはず。大きな悲しみ、苦しみの中には、必ずそれと同じくらいいや、それ以上に大きな喜びと幸福が、隠されているものなのです。たとえその時は、抱えきれないほどの悲しみであっても、いつか、それが人生の喜びに変わるときが、きっと訪れます。深い悲し

み、苦しみを通してのみ、見えてくる世界があることを忘れないで下さい。そして悲しむ自分を、苦しむ自分を、そっくりそのままささえていく。さる大地のあることに気づいてください。それがお母さんの心からの願いなのです。お母さんの子どもに生まれてくれて、ありがとう。本当に本当にありがとう。」

「お母さんはいつも思いますが。与えられた平野恵子という生を尽くし終えた時、お母さんは嬉々として、「いのちの故郷」へ帰ってゆくだろうと。そして、空気がなつて空へ舞い、風となつてあなた達と共に野を駆け巡るだろうと。緑の草木となつてあなたたちを慰め、美しい花となつてあなた達を喜ばせます。また水と

喜ばせます。また水と